

特集 (再生可能エネルギーと景観特集号)

巻頭言：再生可能エネルギーと景観

芝浦工業大学 建築学部 建築学科 教授 志村 秀明
しむら ひであき

太陽光や風力、水力、地熱、バイオマスといった自然資源による再生可能エネルギーへの転換が世界的に進んでいる。日本では2011年に起きた東日本大震災での原発事故への反省による「再生可能エネルギー固定価格買取制度(FIT)」が創設されたことから急速に転換し始めた。その後「国連気候変動枠組条約締結国際会議(COP)」での議論が進み、日本は2030年までに温室効果ガスの46%削減(2013年比)、そして2050年までのカーボンニュートラル達成を目標としている。カーボンニュートラルの実現には、総電力量の約5~6割を再生可能エネルギーで賄うとしている。各地で設置が進む太陽光発電施設や風力発電施設は、すでに各地の景観に多大な影響を及ぼし始めている。

そこで自治体は、太陽光発電施設や風力発電施設を規制する条例やガイドラインの策定などで対応しているが、果たしてそれは景観問題の核心を突いているのだろうか。

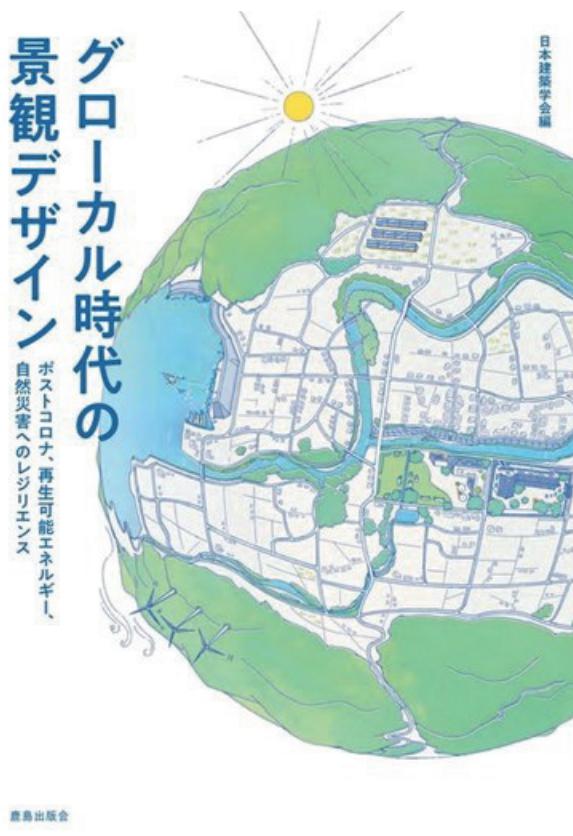
2000年に締結された「欧洲景観条約」では、「『景観』とは、人々によって知覚される地域であり、その特性は自然の作用と人間の作用、あるいはそれら相互作用による結果である。」(原文：“Landscape” means an area, as perceived by people, whose character is the result of the action and interaction of natural and / or human factors.)と定義している。歴史的に西洋と東洋

とでは自然と人間との関係はかなり異なるので、この定義を全面的に支持するわけではないが、「景観」という言葉は、ドイツ語の Landschaft を訳出するために考案された造語であることから、その定義の意味するところを参考にしないわけにはいかない。まず「人々によって知覚される地域」というくだりである。地表の眺めである「風景」よりも、土地の広がりを示す「地域=area」を前面に出している。景観は、「人々によって知覚される地域」であり、日本で一般的に受け取られているような「単なる視覚的に認識できる物的環境」ではないことは念頭におくべきだろう。次に「自然の作用と人間の作用、あるいはそれら相互作用による結果」というくだりである。再生可能エネルギーへの転換が進んでいるのは、熱波といった世界的な異常気象や集中豪雨などによる自然災害が各地で急増し、気候変動が人々の生活に深刻な影響をもたらしているからである。このような「自然の作用」は二酸化炭素などの温室効果ガスの排出といった「人間の作用」が原因かと思われるが、この「自然の作用」が今度は再生可能エネルギーへの転換で各地の美しい自然の中に太陽光発電施設や風力発電施設が林立するという「人間の作用」を引き起こしている。どうすればこの「イタチごっこ」を抜け出し、「相互作用による結果」が豊かな景観づくりへの相乗効果を生み出せるのか真剣に考えるタイミングなのだろう。

筆者が主査を務めている日本建築学会都市計画委員会グローカル景観デザイン小委員会は、再生可能エネルギーと景観に関する研究を進めるにあたり、景観を「人間をとりまく環境のながめであり、人々の暮らしの積み重ねや地域自治によって成立するもので、持続可能なまちづくりや地域づくりの礎となる」と定義した。それは「地表の眺め」よりも「地域としてのまとまり」や、「自然が豊かな地方の農山村地域とエネルギーを大量に消

費する大都市との関係といった地域づくり」の重要性を打ち出すことを意図したからである。

本稿では、グローカル景観デザイン小委員会が設定した景観の定義を踏まえて、いくつかの着眼点から、再生可能エネルギーをめぐって、急速に変わりつつある景観の現状を把握し、景観が直面している課題を抽出し、景観デザイン向上のための論点を明確化し、今後の景観デザインについて提言したいと考えている。



「グローカル時代の景観デザイン」

日本建築学会（著）

発売日：2025年1月20日

出版社：鹿島出版会

ISBN/JAN：9784306073715

志村秀明／栗山尚子／益尾孝祐／沼田麻美子／秋田典子／阿久井康平／阿部大輔／阿部貴弘／大窪健之／大野 整／尾野 薫／金 度源／佐藤宏亮／高取千佳／竹中克行／原田栄二／樋渡 彩／星野裕司／益子智之／松井大輔／宮脇 勝／村上 迅／森 朋子／渡部 健